

ESD 次の一歩へ



第2回岡山市立公民館大会

見つけよう あなたの地域の未来を
—— 知ってひろげてつながって ——

報 告 集

作成・発行：公民館振興室 / 第2回岡山市立公民館大会実行委員会

岡山市教育委員会事務局 生涯学習部 生涯学習課 公民館振興室
〒700-0903 岡山市北区幸町10-16 西川アイプラザ 4階
[TEL] 086-234-6015 [FAX] 086-234-6016

第2回岡山市立公民館大会（2019年2月3日）

目 次

1	実行委員長あいさつ	1
2	パネルディスカッション	3
3	分科会のまとめ	
	第1分科会（地域の子育て支援）	16
	第2分科会（防災・減災）	20
	第3分科会（地域福祉）	23
	第4分科会（若者の参画）	27
	第5分科会（次世代につなぐ地域づくり）	31
4	第2回公民館大会開催ストーリー	35
5	アンケート結果	43
6	資料（チラシ）	58

開会のご挨拶

常山は淡い青紫色に染まり、もえ出ずる備前の春はそこまで来ていることを告げております。本日、「E S D 次の一歩へ 見つけよう あなたの地域の未来を一知ってひろげてつながって一」のテーマのもと第2回岡山市立公民館大会が開催されますことは意義深いことと存じます。

先ずもって本大会の開催にあたり極めてご多用の中ご臨席賜りました岡山市長大森雅夫様、岡山市教育委員会菅野和良様、そして講師として香川大学教授地域連携生涯学習センター長清國祐二様に衷心より厚くお礼申し上げます。

さて、皆様のご記憶にも新しい2014年「E S D 推進のための公民館—CLC 国際会議」がもたれ国内外に岡山の名を知らしめました。未来へつなごう岡山E S Dの流れは本日に脈々とつながり本年度は300名以上の参加を得て更なる発展を遂げておりますことを誠に嬉しく喜ばしく存じます。公民館職員の方、公民館振興室の方々や市民協働により受け継がれプレ大会・第1回大会・本大会の2回大会と人づくり地域づくりを紡いできております。

それは一つには、本日のオープニングの朗読劇に登場した、この地灘崎の若者組織として公民館に創設された「チーム灘」に、まさに結実したと言えますし、さらにこれからの公民館の方向性を示す象徴なのでしょう。

昨今、社会に目を転じますと、人口減少、高齢化の進展、I C TやA Iを用いた技術革新、グローバル化、国際的な地位の低下、加えて人間関係の希薄化、常態化した災害は喫緊の課題となっております。そうした折、地域づくり人づくりの中核的機関として公民館の果たす役割は益々クローズアップされてきております。多様なニーズに応えるべく子どもから大人まで創意工夫を凝らした特色ある事業や活動が地域の特性を生かしながら各公民館において取り組まれています。

午前は分科会助言者の方々によるパネルディスカッションが設定され課題や方向性が見えてくることと存じます。午後からは5つの分科会に分かれ実践発表と討議がなされます。E S Dや市民協働の視点を取り入れた講座やワークショップを行う等、各公民館で可能性に挑戦する取り組みが見られることでしょう。

一方で地方創生、生涯学習、持続可能な社会づくり、4月からは他民族との共生も加わってくることを忘れてはなりません。誰もが社会の担い手となるための学びが大切となりまちづくりに関する人材育成が急務になってくることでしょう。

結びにあたり、ご参加の皆様が本日の参加を得て心に期するものがあり、一歩を踏み出すきっかけになりますよう念じつつ開会のご挨拶とさせていただきます。

第2回岡山市立公民館大会 実行委員長 二部野淑恵

＜パネルディスカッション＞

【テーマ】

ESD次の一歩へ

見つけよう あなたの地域の未来を ー知って ひろげて つながってー

【コーディネーター】

清國 祐二さん（香川大学教授／地域連携・生涯学習センター長）

【パネリスト】（各分科会の助言者）

＜第1分科会 地域の子育て支援＞

赤迫 康代さん（NPO法人子ども達の環境を考えるひこうせん代表理事）

＜第2分科会 防災・減災＞

西村 輝さん

（岡山市防災ボランティアネットワーク・防災士）

＜第3分科会 地域福祉＞

久富 めぐみさん

（特別養護老人ホーム穂香の里施設長／上南在宅介護支援センターセンター長）

＜第4分科会 若者の参画＞

江森 真矢子さん（元和気町地域おこし協力隊高校魅力化担当）

＜第5分科会 次世代につなぐ地域づくり＞

岩田 渥男さん（松江市玉湯公民館館長）

清國

パネルディスカッションのコーディネーターということではございますが、限られた時間でございますので、分科会の特徴がうまくみなさん方に伝わればよいなと思っております。

本日、2月3日ですが、来る時には電車がいつもより多くて、よく見ると丸亀のハーフマラソンがあるようで、市民ランナーがたくさん電車に乗っておいりました。また、2月3日節分の日ですが、恵方巻き、これが全国区になって10年ほどになるらしいですが、今一番大きな問題は廃棄だそうです。ものすごくたくさんの恵方巻きが廃棄されて、総額10億円ぐらいの無駄になるのではないかなというように言われております。食品ロスが環境問題ですね。岡山市では、ずっとESDに取り組んでおられて、そのような社会的な問題にどう取り組んでいくかということ、公民館を中心にしながらみなさんの学びの中でいろいろな改善の取り組みをされておられたのではないかなと思っております。

そういった身近な課題もございまして、現在、社会教育をめぐる、ある意味必要性が高まってきているということでもありますが、一方で社会教育ではなくてもよいではないか、そういう動きもあつたりします。公民館にしても、社会教育にしても何をこれからすすめていくか、「ESD次の一歩へ」ということですね。次の一歩へ向けて何が私たちに求められているのかということがございます。公民館、社会教育が戦後の民主化とともに地域へ広がっていったわけですがけれども、社会教育行政が教育を行うわけではありません。社会教育は誰かが特定の目的のもとに恣意的に教育を地域で行うのではなく、公民館というとても民主的な場で、地域住民がそれぞれに学び合い、関わり合い、そして地域の未来を築いていくわけです。そこが原点だと思うのです。誰かが教えるものではない。その原点に立ち返って、ESDの次の第一歩が、本日、分科会を中心にしながら語っていければいいのだらうと思っております。

そのようなところで、本日の分科会の助言者として、これから役割を務めていただきますみなさま方に、分科会の大体のエキスになるようなことをお話いただきまして、それであと残った時間、少し

おしているようですが、残った時間のところで何か共通に見えるもの、テーマ、タイトルになっているようなもの、そこがふれられればよいなというように思っています。寒い中ではございますが、どうぞみなさん、お耳はこちらに傾けていただければと思います。

それでは最初は、第1分科会の助言者であります赤迫さんからお話をいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

赤迫

みなさん、おはようございます。赤迫と申します。私は「子どもたちの環境を考えるひこうせん」の代表をしています。団体が発足したのは平成13年で、もう少しで20年近くになります。我が子3人はみんな20代になりましたが、その子たちが幼かった頃、自分の子育てを通して子育て環境に課題を感じ、交流の促進や親の学びを通じたエンパワーメント支援を中心に今日まで活動をしてきました。子育てに関する出前講座も行っていて様々な公民館さんとも連携をさせていただいております。

子どもたちの環境の変化は著しいものがあって、それによって身体が育ちにくい、人とふれあう機会が少ないため心の面も育ちにくい現状があります。最近はスマホなどの普及によって学力面も影響を受けています。ある中学校の先生が小学校の校長先生に異動になられた時に、小学生の運動能力の実情におどかれたそうです。ブランコがこげない、雲梯が渡れない、斜面に登れないなど、様々な場面で驚かれ、これは何とかしなければと、学校である体操を取り入れたそうです。それを毎日繰り返すことで子どもたちが見る見る変わってきたとお話してくださいました。そのように、環境の変化を補うよう応援していかないと、子ども本来の力が発揮できないのが現代だと思っています。また、若者の自己肯定感が日本は世界各国に比べて低いと言われていています。それらも含めて考えると、やはり乳幼児期から思春期までもっと社会教育の中でできることがあるのではないかと思います。乳幼児期は愛着形成、そして心の土台をつくる時期。それを基盤にして学童期は、もう少し広い社会に出て、世代間交流の中でたくさんの文化に出会ったり、体験を広げながら、自分の得意なものややりたいことを見つけていくことが大切だと思うのですが、そのような機会が少なくなっていると思います。

そのような中で、第1分科会ではまさにその現代課題に対応していただいている活動内容です。福浜公民館、京山公民館の事例を報告していただきます。学童期、思春期のお子さんを主な対象にした活動をされています。

福浜公民館は「子どもと地域の大人が会う『夏休みクラブチャレンジ』」です。普段、公民館で文化活動をされているグループの方々がいつもの活動の延長線上として子どもたちをお招きし、自然体で無理のない形で様々な体験を子どもたちに提供されています。今年は28クラブが協力してくださったとお聞きしています。子どもたちにとって大変重要な機会になっていると思います。

京山公民館は「地域の宝！楽しく遊べるみんなの居場所『ほっとスペース放課後』」という活動で、地域の大人や学生さんたちが月1回のスタッフ会議や、研修を行ないながらボランティアで運営をされています。伝統的な遊びや将棋、オセロ、折り紙など、主体的に子どもたちが遊べる活動を定期的に週2回行われているということです。「定期的」な形がとても大切ではないかと思っています。

どちらの活動も、地域の中で安心できる居場所を作られていて、子どもたちが様々な大人と出会い多様な体験活動や楽しいあそびができています。なおかつ、支える大人の方々もいきいき楽しそうに無理なくされている。この継続的な活動がとても素晴らしいと思います。私も具体的なお話を楽しみにしています。

「ひこうせん」の活動の中でも自己肯定感を育む地域づくりや、テレビゲームよりももっと魅力的な遊びを広げる努力を行なっているので、アフター下校の公民館活動をありがたく思います。今後は、そのような活動に、子育て中の当事者も主体的に参画できるような仕組みができいくとよいのではないかと考えています。

ひこうせんも、公民館と連携して子育て講座をさせていただいています。スタートは上道公民館で、今はその他の様々な公民館とも一緒させていただくことがあるのですが、公民館が計画される子育て講座に参加される保護者の方は、地域のキーパーソンとして、リーダー的な存在に成長されることが多いです。そのようなことと両輪で活動をしていくと保護者と地域の方が一緒になって子どもたちを育ていけるように思います。第1分科会、楽しみにしています。

清國

はい、ありがとうございます。第1分科会の「みんなで子育て、どんどん広がる地域の輪～新しい出会いから年代をこえた友だちづくり」。年代をこえた友だちづくり。赤迫さんがおしゃってくださったように、それは次の世代のリーダーを、人材を育成する場にもなっているということのようでしょうから、非常に今回の発表も楽しみなことでございます。

それでは第2分科会。西村さんの方からご紹介をお願いします。

西村

第2分科会の「防災・減災」を担当します西村でございます。案内では岡山市防災ボランティアネットワークということですが、実はこの灘崎の北側、岡山の西の端の吉備学区という所の連合町内会長もしております。連合町内会長をしておりますので、吉備の公民館とも非常に親しい間柄ということで、いろいろな防災展と防災キャンプとかを行ってきております。吉備の公民館では、2011年に最初の防災のイベントを開催しています。

2011年と言いますと、東北の震災があった年です。私は4月、3.11ですから3月11日ですね。その後、4月1日から半月ほど東北の避難所のお手伝いに行かせていただいております。それから、熊本地震の時も半月ほど同じく避難所のお手伝いに行かせていただいております。岡山で災害と言いますと、どうしても去年の7月豪雨ということになります。私仕事柄、地盤工学という分野で仕事をさせていただいております。そのため、7月の豪雨の時も、7月9日から真備の方の小田川の堤防決壊の状況とかを見て歩きました。その後、岡山市の方に社協さんによって災害ボランティアセンターが開設されましたので、岡山市の北区の方のボランティアセンターの方にコーディネーターという役でお手伝いをずっとさせていただいております。岡山市のボランティアセンターで、ニーズが一段落ついたかなというような後、真備の方の岡田小学校にお手伝いに行かせていただいているというような経緯がございます。

こういった中で、公民館がこういう防災、災害があった時にどういう活動ができるかというのは、なかなか難しいところではあると思うのですが、私が期待しているのは、やはり事前の教育です。地域の方々に災害はどうして起こるかということから、災害が起こったらどうになってしまうのか、それから、その後の避難所の運営の態勢はどうするのかということで、事前に知らしめていただいて、よりよい、よりよいって言ったらちょっと語弊がありますがね。災害が起こった際の対応を市民の方々に、どういうふうに心構えをもっていただくか、というような教育をしっかりとできるのが、公民館の一つのテーマではないかと考えています。

吉備公民館では、防災キャンプを第一回から本年度までずっと続けてきていますし、来年度も一応やる予定ではございます。そうした中で、どうしても継続していくっていう力が必要になってきます。一回きりでは、この聴いた話も来年になると忘れてしまう。それから、災害自体も岡山市が去年の洪水の時もかなりの面積が浸水しております。これが浸水していないエリアの方々は、やっぱり対岸の火事みたいなところがありまして、岡山市全体は、いつ、どこが洪水になってもおかしくない、岡山平野ですね、という状態にあります。それから、今回の洪水の時には気象庁が言っている100年雨量、100年に一回降るかもしれないよっていう雨量を想定して、いろんな仮説設定とかがされています。そんな中で、地震もね、南海トラフ地震もね、100年に一回起こるんですよ。といった意味で、今は防災が大変だったねっていうことで、みなさんお話をされていると思うんですが、今日来てくださっている「チーム灘」の方々は南海トラフの地震はたぶん経験することになると思います。みなさんも経験することになるかもしれません。といった感じで日ごろの豪雨に対する心構え、それから、地震に対する心構えをきちんと地域の方々に知らしめていってですね、少しでも減災に貢献できるような活動をしていただければというふうに思っています。そういった観点で第2分科会の防災・減災の方は一生懸命やっていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

清國

ありがとうございます。西村さんは、森田さんがインフルエンザに罹ってしまい、急遽ピンチヒッターでご登壇されたんですね。これまた世の中何が起こるかわからない、なるほどわからないんですが、それに対応できたのは、まさに地域的なネットワークがあったらからこそ、即、次の登壇者が見つかったということだと思います。

教育とは予防だと、予防のために私たちが学ぶことがいかに大事かということ、基本的なところとして押さえていただいたように思います。

それでは、第3分科会の久富さんよろしくお願いいたします。

久富

第3分科会「地域・福祉をつなぐ公民館～共生社会をめざして～」というところを担当させていただきます久富です。今回この分科会を引き受けさせていただくということになったのは、4年前ですが地域包括支援センターのサブセンターという地域の相談を受けたり、地域福祉を担っていく部署におりまして、その時にほんとに公民館さんを通じた住民の方々とのつながりから、いろんな取り組みについて、地域の中に発展していったというところを、今回ご紹介することになっています。その中で、公民館さんと数回いろいろと打ち合わせを重ねていく中で、公民館さんの熱い思いというもの、とても私の中に伝わったことと、私がこの会場の地元出身ということもありまして、安易に引き受けさせてもらったということです。

まず、政令都市岡山になってからですが、現在65歳以上の高齢者が18万人を超えています。市民の4人に1人が高齢者という超高齢社会。高齢化社会を過ぎまして、超高齢社会にという現状になっている中で、さまざまな地域で暮らしているの方々にとって、大きな問題が起こっています。その中には、よく例えられます、孤独死だったりとか、買い物難民だったり、灘崎でもいろんなことが問題になっていると思います。そういった超高齢社会の中で起こっている問題について、自助、共助、公助、互助という4つの助け合いがあると言われていています。その助け合いも、それぞれに単独の働きをしていたのでは、つながっていない。やっぱりそれを横断的に横のつながりを持ちながら、いろんなとこ

ろをみんなで、自助というところを超えて、お互い様、隣近所とみんなが繋がっていくこと（共助）、地域で暮らしている様々な方が孤立することなく、だれもが自分らしく、いきいきと暮らし、支え合う社会になっていくのではないかということで、これがとても今は大きな課題になっていると思います。

この自分らしくいきいきと暮らし、互いに支え合う社会というのを地域共生社会と言うそうです。公民館では過去2回このような分科会を開かれ、様々な地区の方の活動とか情報交換という機会をもってこられました。これまでも公民館の役割について議論を深める中で、地域にあって人や情報が集まる場所である、人、団体活動をつなぐ機能を担うという公民館への期待というのはとても多く寄せられていました。私も第2回に参加させていただいたんですけど、本当に熱い思いというのが伝わってきました。これからの時代にこれらの自助、共助、互助、公助という4つの助けなんですけども、先程も申し上げましたようにそれらが影響し合う横断的な仕組みというのが、大きなキーになってくると思います。そこで、3回目の地域福祉をテーマに据えた分科会ではそのことに気づいて、地域の人々がお互いに持っている力や思いを共有し、試行錯誤しながらも自分たち流の地域共生社会を形づくる取り組みとか、まさにつなぐ機能という公民館の機能について、地域で暮らす生活に密着した事例をとおして、そういうことを考えていく機会にしたいと思っています。

そこで、その内容としましては「公民館に届く小さな声をひろうことから、実現できたこと～平成30年7月豪雨災害をふりかえって～」をテーマに上道公民館のその時に対応してくださった片山さんという職員の方から7月の豪雨災害で大きな被害をうけた平島地区ですね、災害という非日常の状況の中でどんな公民館が働きかけができたのか、その役割が果たせたのかの振り返りについてご報告いただきます。さらに、その豪雨災害の時に住民側で地域に向けて様々な取り組みを行っている平島健康福祉委員会の柿崎さんには災害時に上道公民館と連携をとってどんな活動が行われたのか、普段の活動とともに地域福祉をつなぐ公民館に期待する事も含めてご報告いただきます。

また、最後に私が上南学区というところにおりますが、公的な機関、社会福祉協議会、地域包括支援センター、公民館、保健センター、在宅介護支援センターという機関がつながることで、地域の方々とともに地域の課題への取り組みを行っていることをその事例を通して、公民館のつなぐ役割についても紹介していきたいと思っています。

そして、分科会の後半では、各グループの方々と共に具体的な場面を通じて公民館がつなぐ役割について、いっしょに考える機会にさせていただきたいと思います。

私個人的なことですが、公民館とのつながりということ振り返ったときに、最初、独身の時には公民館という言葉さえも十分に理解しておりませんでした。それから、子育て中にこの公民館にみんな集まって保健師さんの指導を受けたり、役員会を開く中で集いの場としての公民館という機能を知りました。その後、地元の社会福祉協議会に勤務している際に、今度は公民館の社会教育という機能の中で、さまざまなことを協働させていただいたことを今振り返っています。そして、現在は地域の中にある公民館さんのつなぐ機能をきっかけに地域住民の方とこの公的な5つの機関が一緒になってつながっていくという体験をさせていただいています。このようなことをこの分科会でみなさんと共有できたらと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

清國

どうもありがとうございます。豪雨災害の時の公民館のあり方を話していただけるということで、過去の総括がなされるようで、そういうことも期待されるところでございます。

教育分野と福祉分野、本当は近いはずなんですよね。教育自体福祉的な要素から始まっております。初等教育のでき方は、子どもを労働から守るという福祉の発想もあります。ただ、行政的には縦割りで少し壁があるというのが現実だと思います。しかしながら、地域に根差す公民館は行政の縦割りの壁を破れる可能性を大いに持っています。現実的にやっておられる公民館も多いのだらうと思います。分科会がワークショップ的な手法を用いて実施され、対話によって中身が深まっていくことが期待できそうですね。それでは、続きまして、第4分科会、江森さんからよろしく申し上げます。

江森

和気町から参りました江森と申します。私は去年の3月まで和気町の地域おこし協力隊として、町内にある和気閑谷高校の魅力化事業に取り組んでいました。私は東京生まれの東京育ちで、4年前初めて岡山に引っ越して来るまでは、まったく東京を出たことがありませんでした。その時の公民館とか行政というのは、税金を払ったらサービスを提供してくれる場所という感じで、自分が地域づくりの一員になるってというような意識はまったくなく、公民館は場所を貸してくれるところってぐらいのイメージでした。岡山に来てから高校でも公民館の方にいろいろ協力をしていただいて公民館活動のめくるめく多様な世界に触れておもしろいな、すごいなと思いながらいるところです。

今回こちらにお招きいただきできましたのは、去年、西大寺公民館で高校生プロジェクトに関わったことがきっかけです。高校生が西大寺のまちなかで、自分たちがやりたいことを企画して実行するクリスマス時期にイベントをやりました。

もう少し和気町でやっていたことをお話いたしますと、高校生が地域に出て学ぶ総合的な学習の時間のコーディネート、カリキュラムづくりをしていました。目的としては、持続可能な地域の担い手を高校でも育てていこうということで、まちの課題を解決したり、まちのイベントに高校生が参加したり、自分たちの手でできることを実践することが目標です。自分たちの未来も、社会の未来も、自分たちの手で作っていける人たちになろうと伝えながら活動していました。

去年もこの会の若者の参画分科会で、どうしたら若者が地域づくりに参加してくれるのか、公民館活動に参加してくれるのだろうかというテーマで話し合いをしたそうなんです。その話し合いの中で、そもそも若者が何を望んでいるのだろうか、若者はどんな地域になったらいいと思っているのか、どんな形で地域に参加したいと思っているのかを聴かなきゃいけないという問題意識が浮かび上がりました。今年は司会も、朗読劇もしてくださったチーム灘のみなさんですとか、西大寺公民館の高校生プロジェクトに参加した中学生、高校生が分科会に参加してくれます。彼らとっしょに、どうしていこうかという話をしていくのがこの分科会になります。

中高生のみなさんには、ぜひ大人に付度することなく、大人はこう言ったらうれしいんじゃないかなとか考えず参加してくださいね。今の社会課題は、大人がつくってきたものなので、そこに立ち向かっていかななくてはならないこともあるかもしれないですけども、自分たちだったらこういう社会になったら生きていきがいがあるなあとか、こんな大人になりたいなあ、こんなふうに楽しく生活したいなあという発想をベースに話をしてもらえたらうれしいです。

今、社会教育の分野でも若者の参画が言われていますけれども、私はずっと関わってきた学校教育の分野でも、文科省は若者が地域課題解決に取り組む探究的な学び、ものすごく予算がついたり、推進されているということがあります。その中で、岡山県は実は先進地域です。岡山の高校は、別に上から言われた訳でもないんですけども、地域に高校生が出て行って、地域の人たちとっしょに何かすることを推進している地域です。高校もすごく公民館には期待してまして、実際にいろんな公

民館の人に来てもらっている高校もありますし、今、社会教育と学校教育の垣根も少しずつなくなってきているおもしろい状況だと思っています。「若者一人一人が『生き生き』！その未来とは」が第4分科会のテーマです。これをぜひ皆さんと一緒に考えていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

清國

どうもありがとうございます。まさに未来の担い手をどう育むか、ということが、若者を含めて議論される、非常に楽しい分科会となるのだろうと思いました。

最初のところで江森さんがおっしゃった、公民館は良心的でなんでもやってくれる、公的サービスをやってくれるところだ、というところの意識の転換も早いうちから図っておくのも確かに大事ななあ、と考えました。公民館は地域の拠点で、その拠点あって活用して自分たちのまちをどうつくっていくか、地域住民自らが学び、行動するような場所、このような公民館こそが、今求められているんだなあ、と。だからこそ中高生にも、地域の拠点である公民館に巻き込むことがその意識改革にも有効である、というような話だったように思います。

皆さん方も課題に思っておられることではないかと思いますが、公民館を活用した地域住民の主体的参画へと発展が見られることを期待しています。

それでは最後第5分科会になります。市から岩田公民館長さんがいらしていただきました。岩田さん、よろしくお願いいたします。

岩田

松江市玉湯公民館の岩田と申します。第5分科会では、高松公民館さんから「高松の歴史文化を次世代に継承するための各団体の取り組み」と題して、高松中学校で3ヶ月に一回開かれている放課後歴史講座や造山古墳ボランティア養成講座などをとおして、地域の歴史を次世代に継承するための取り組みについて発表されます。また、大元公民館さんからは「次世代に向けて人と人とをつなぐ！『大自己紹介大会』からの『ノーブラン！お泊り大会』」と題して、若い世代と地域住民をつなぐ取り組み、世代を越えて新たな人間関係づくりをめざし、桑田ももっとも会を中心に活動し、成果を上げておられることについての発表があります。

私は松江市玉湯町に住んでいます。玉湯町は平成17年、松江市と合併いたしました。現在、人口は6,900人、人口減少が続く中、玉湯町はこの10年で800人人口が増えました。住民の皆さんから「玉湯っていいね」という声が多く聞かれ、住宅を求める人が多い状況です。この要因には、玉湯町の交通の便がいい、自然に恵まれている、玉造温泉があり子育て環境がいい、住んでいる人がいい、など挙げられますけれども、もう一つ、若者グループの存在があります。

私は平成17年、合併したと同時に館長になりました。その年の秋に開催した文化祭、スタッフとして活動する若者の姿が見られない、本当に寂しかったです。次の年、平成18年、文化祭で模擬店や運営スタッフとして活動しませんか、というチラシを持って中学校へお願いに行きました。校長先生からは、「生徒たちは勉強や部活動で忙しい、先生方も多忙である。中学校の文化祭は生徒にとって達成感がある、けども、公民館の文化祭では達成感がない」と断られました。粘り強く幾度となくお願いに行きました。その結果、一日目は出校日として全校生徒を参加させる、展示・発表もいたします、二日目はボランティアに参加させるという連絡が入りました。この時の感激は今でも忘れることができません。

子どもたちは模擬店で作るたこ焼きなど一所懸命練習しました。そしてポスターを作って準備いたしました。当日生徒たちは、いきいきと活動し、終わった後「地域の人とのふれあいが良かった、本当に楽しかった」ということを言ってくれました。地域の人からは「中学生から元気をもらった、子どもを見る目が変わった、玉湯のまちは生まれ変わったようだ」との感想が出ました。文化祭は人であふれ大成功に終わりました。

次の年、平成19年、高校へ進学した子どもたちが「地域の人とふれあった文化祭が忘れられない、今年も参加させてほしい」と言ってきました。そこで、そういう形で参加するならば、地域で活動するボランティアグループを作らないかと呼びかけました。子どもたちは「やりましょう」ということで、たまゆメンバーズたまゆ“たまめん”を立ち上げました。文化祭では中学生の指導役となり、大人のスタッフと一緒に活動して大変盛り上がりました。それが契機となって町内すべての保育園、幼稚園、小学校、中学校が一日目出校日となりました。展示発表にも参加します。けっこう広い公民館ですけれども、あふれるほどの来館者があって、大変なにぎわいのお祭りとなっています。

結成以来、たまめんは公民館の行事や地区のイベントなどで活動しています。毎月定例会を開催して話し合い、子どもたちを呼び込む活動、星空観察会や子ども食堂の開催、ダンスサークルを作って子どもたちに教える、そういう実質的な活動も行っています。たまめんの活動は、地域の皆さんから支持され、玉メンの活動を支援する玉メンサポーターズも結成されました。大きくなったら玉メンになりたいという子どももたくさんいます。そして、イベントや事業への参加者やスタッフが大幅に増えました。その活動をとおして、明るい地域づくり、地域の世代間交流、子どもたちのふる里を愛する気持ちを育んでいます。そういうことが次世代へつながっているのかなあというふうに感じています。

この分科会では、次世代をすぐ後に続く世代ととらえ、郷土愛を育みながら、楽しく充実した活動が継続できる仕組みづくりを考えたいと思っています。失礼しました。

清國

どうもありがとうございます。「つなぐ」という言葉がここにもあるんですが、「知って ひろげて つながって」と、「つながる」っていうのは、横につながるというのが通常のイメージだと思いますが、世代を越えてつながっていくということもある。そこが第5分科会の大きなテーマでもあるのですね。継承という言葉もタイトルの中にございますが、この継承、何を継承するか、実際にはいろんな継承があるんだろうと思います。西村さんの防災への取組でいえば、それもまた歴史の繰り返しのなかで継承していきながら持続可能性といいますか、危険を回避するようなどころがあるのでしょうか。子育てなどはまさに継承される人間の営みであって、赤迫さんの取組とつながります。横と縦と過去と現在と未来とのつながり、ものすごい大きな物語になっているように感じました。

この5つの分科会がひとつになると全体が明るく照らされるわけですね。ちょっとそれだと欲張りすぎて時間も足りませんので便宜的に分科会ごとにテーマを追求するということになっているんだろうと思います。ものすごく広いつながり、そのつながりについて、少し質問をしながら、事前に考えるヒントをいただきたいと思っています。

赤迫さんには、先程申しました子育てって人間にとって基本的な継承すべき営みですよ。次世代を育む上で一番の基本となるのが乳児期から学童期であるということをおっしゃっていました。現代はそこをうまく伝える仕組みが地域の中になから赤迫さんの取組が始まったわけなんですね。子育てという観点から、感想のようなことでも結構なんですけど、継承についてご発言をいただけますか。

赤迫

子育てをしている人同士がつながったり、地域の人に支えていただきながら子育てができていいのか、というと、今は自然発生的には生まれにくいと思います。出産後早い時期から両親共にお仕事をされるご家庭も増えているし、大人がとても忙しくゆとりがないという状況もあります。私たちが運営している子育て支援拠点でも、以前は乳幼児期に3～4年間親子で通われて、その時期に子育て仲間ができ、人のつながりも深まっていった上で幼稚園や保育園など次のステージに進むというように、乳幼児期はつながりづくりの大切な時間として過ごせましたが、最近はその期間が一年ほどしか持てない方々も増えています。そのような中でつながりをつくっていくには、社会教育としても積極的に居場所や出会いの場作りを進めていかなければ、孤立した子育てになっていく可能性は高いと感じています。

清國

いまその仕組みが大事ってことなんですね。放っておくとつながっていかないの、じゃあその仕組みをどうのように作っていくか、仕組みが伝承とか継承につながっていくということですから、まずは公民館の役割は大きくなるということだと思うんですね。

そのあたりの継承、防災などまさに命を守る、それをつないでいかなければいけないという観点からすると連合自治会とか自治会の役割はあるでしょうし、公民館というのも一方ではありますが、その辺のところから西村さん、公民館の方々に伝えたいようなことはございますでしょうか。

西村

防災に関しては公民館で「知ってひろげてつながって」と意味では、ものすごくいい組織というか団体というか、なんですね。防災というのは赤ちゃんからお年寄りまで全部に関わることなんですね。年齢的には。そういう観点で言うと、やはり若い元気な人が子どもを助ける、それからおじいちゃんおばあちゃんを助けるという意味では、地域のうちの近所にはどういうどんな赤ちゃんがいて、それからどんなおじいちゃんおばあちゃんがいて、また障がいを持っている方とかね、そういった方もこの近所にはいらっしゃるってことを、地域として総合的にやはり見ていく必要があるということが当然あると思うんですね。そういった中で公民館は当然個別の情報は知らないの、そういった個別の情報を地域の方々に手助けする役割が非常に重要なというふうに思いますので、その概念的なレクチャーをぜひ重点的にやっていただければ、被災された方々にも少しでも大難が小難にというような形で助け合えるのではないかと考えています。

清國

ありがとうございます。なかなか難しいのが次の久富さんにもお話をふりたいと思いますが。情報が公民館で把握できているものと、福祉のサイドが持っている情報とはやはりずいぶん質が違うものがあると思うんですね。個人情報の問題ですとか様々なことがあって、どこに誰が住んでいてどういう年齢構成でどのような課題を抱えているのかが分かればつながりやすい。でもその情報はなかなか公民館というか一般の方には届けられないような今状況だと思うんですね。

そこがまず行政的には連携しづらいところであったかと思うのですが、それを越える場というのがある種の公民館といういろんな機能を、本当によろず相談所ではないですが持った施設であるかなと

いうのもあろうかと思うんですけども。そういった連携という行政的な連携とちよつと指揮命令系統の違うものがつながりあうということのですね、困難さよりは未来に向かってどのようなことに配慮しながらつながっていくとより情報も共有できて、より幸せな地域づくりにつながるかというところで何かご示唆いただけるとありがたいなと思います。

久富

今の先生からのご質問ですけども、行政は本当に私も長年仕事をしてきまして、正面から向かい合うと壁はすごく厚いですね。いろんなところからそれぞれの仕事を担っているでなかなかそれを越えて出て行くということは難しいのですが、ある意味公民館というのは行政の人達にもそのまま使えますし、行政のいろんな情報というのもずっと流れていくというかそんな所だと思うんですね。

そんな中で地域の方たちには公民館が地元にありますから、趣味の活動であったり集う場としてよく出入りをみなさんされますから、そこで地域の人達はすごく早いです。情報をキャッチされたりとか、情報が流れるのが。良くも悪くも情報がすごくスムーズに動いていっているところなんですね。そういうところへ上南の場合でいうと行政の地区担当者、みなさん地区担当者の方のお顔とか名前をご存じの方ってあまりおられないと思うんですけども、そういう地区担当者も一緒に出入りして、公民館さんと動くことでその流れていく情報をキャッチすることができます。反対に「しゃちほこ(社地包公)の会」というところを通じて公民館さんもこんなことがありますよということをその流れの中に行政的なことも入れて行けるといえるところでは、それを例えば保健センターがそういう機能をはたそうと思っても地域包括支援センターが果たそうと思っても無理なところですね。やっぱり地元公民館があるということがとても大きいと思います。そういう意味ではその公民館の「つなぐ」というところをしっかりとみんなが認識して、もっともっと活用させていただいたり、一緒に連携を深めていくということがこれからとても可能なのではないかなと思っています。

清國

どうもありがとうございます。担当者の方と行政の方とのコミュニケーションは大切ですね。役所の仕事も変わりつつあって、今頃は地域担当職員というような、その地域のまちづくりを総合的に支援するような仕組みができています。例えば、地域担当職員に相談すれば役所のいろんな情報を適切に提供いただける。「いや私は今この部署だからこのことしか答えられません」ではなくて、「今役所としては全体としてこういう動きをしています」というような助言やサポートがいただけるような仕組みでしょうか。高松市、丸亀市はそういうものを数年、担当の職員を置いて関わらせようとしています。多分岡山も同じではないかと思いますが、そういったつながりが大事だということもご示唆いただけたように思います。

続いて、江森さんは岡山に来て4年ということなのですが、そういう意味ではよそ者の視点で若者に関わっていらっしゃる。馬鹿者はどこにいるか分かりませんが、よそから来られた方のエネルギーや役割や視点が何か新しいものを生み出していることと思います。若者はまだ地域を相対的に見ることができず、なかなか引き出すことは難しいのではないかと思います。何か心がけておられるようなことがあるんでしょうか。どういうアプローチをすれば若者が心を開いてくれるのか。本当に自分達の地域をこうしたいなということを若者は本当に思っているのか、ということも含めて、少し感触をお話いただけるとありがたいです。

江森

中高生が、スタバもないしマックもないし何もないみその地域を活性化するにはどうしたらいいんだろうかみたいな話をすると、ディズニーランドを作ればいいみたいな発想がよくできます。多分全国のどこの中山間地域でもそういうことになりがちだと思います。大切なのはやっぱり人のつながりなのかなと思っていて、私も和気に来て本当に面白い人たちとたくさん出会いました。どこの地域でも自分らしくいきいき楽しく自分なりに出来ることをやっている人達がいる、そういう人達に出会うと、「あっ、なんかここも捨てたもんじゃないかなあ」とか、「こんな大人になりたいな」というふうに意識が変わっていくのかなと思います。ただ、何もなくて思いながら、一方で、結構今の子ども達って地元が好きというか、地元が好きだしここで生きていきたいし、自分も何かしたいなっている子どもたちも実は増えているんじゃないかという感触もあります。

清國

私も香川大学の学生と普段から付き合っているんですけども、おっしゃるように地元志向は強まっているような感じはいたしますね。実は香川大学の学生は、岡山県出身者が一番多いんですよ。マリンライナーで通えるぐらいの距離でもあります。やはり岡山で働きたい、いやいや香川に残ってこないかと説得しているんですけどもね。そういう状況がある中で、ただ、その地元志向がどこからきているのか、本当に地元の担い手となって自分達が支え手となってやっていくんだという意識があるかどうかは怪しいところがあるのかと思うんですけどね。その辺の感触などをもう一回伺っていいですか。地元志向っていったいどういうことなのでしょうね。

江森

どういうことなのでしょうね。外が怖いからみたいなのところも少しあるかもしれないですし、小中学校のころから総合的な学習の時間とか生活科が始まって、地域に出て行くことが増えているということも影響しているかもしれません。子どもが少なくなってすごく自分が大切にされているという実感も、もしかしたらあるのかもしれませんが。ただ地域を支える担い手になることに関しては、それこそどうしたらいいのか分からないっていう感覚が結構あるんじゃないかなと。自分の手で何かができるとはなかなか思えないとか。そういう意味では公民館で今、子どもたちのいろんな活動を支援していこうというのは、「あっ、このまちで自分がやりたいことができるんだな」と思える一歩としてすごく大きいんじゃないかなと思っています。

清國

それが岩田館長さんの話につながっていくんですけども、まさにその地域で子ども達を公民館の活動にも巻き込みながら育成されているわけですね。そういった若者と関わりながら、「玉湯の若者」そこから見えてくるものというのを少しお話いただけますでしょうか。

岩田

私が一番大事にしていることは、子ども達を活動させる前に必ず、その活動の意義・ねらいをきちんと参加者とスタッフで共有して、とにかくこういうねらいでやるんだとそういうことで活動が楽しくないと子ども達は、次にまた来ようかという気にはなれないわけで、私はそれにまず一番力をいれて子ども達が「あ～やって良かったな」という思いを抱くようなそういうしかけを試みているところ

です。それから終わったあと「みんなよく頑張ったね」ではなくてきちんと検証させる。PDCAと言いますが、とにかく検証これが継続につながるんです。そういう活動を通じて、子ども達は地域の人とふれあって本当に玉湯がいいなということを書いて、たまめの卒業生からは地元でとにかく頑張りたいと。松江市内で勤めていたけど玉湯への思いが強くて今まちおこしで頑張っている子がいたりします。そういうことで、小学生もたまめになりたいという子どもが非常に多い訳で、そういう中から育ってきた子ども達がとにかく玉湯が好きで玉湯で頑張るという気持ちを持ってきているのかなということを感じています。

清國

まさに地域の未来に対して見通しを持って、中高生をそこで育てることができるというのはとても大事なことなんですね。自分に何ができるかということは分からないけれど、その活躍している人達の後ろ姿を見ながら「将来自分も！」という思いがもてるということによって次の時代がつけられるということがよく伝わってまいりました。

この5つの分科会が午後のところでそれぞれの特色を活かしながら展開をしていきます。しかしながらいつも皆様方に思っておいていただきたいのは今回のメインのテーマだと思うんですね。このメインのテーマに必ず戻ってきますので「見つけようあなたの地域の未来を～知って ひろげて つながって～」という意識でご参加いただければ、実りある公民館大会になるだろうと思います。午後もみなさん積極的にご参加ください。パネラーの皆さん方どうもありがとうございました。

第2回岡山市立公民館大会に参加して

清國祐二（香川大学）

公民館の役割を改めて問い返す時期となっている。その中での「公民館探し」の旅に参加したような気分であった。

パネルディスカッションは、これから待ち受ける分科会の助言者をパネラーに据えたユニークな設定であった。分科会後であれば、それぞれの成果を持ち寄り、熱を帯びたパネルになるのかも知れない。そこを「果敢に」チャレンジするには、何か並々ならぬ決意があるに違いない。少し頭をよぎったが、整理できぬまま当日を迎えた。

公民館を拠点にして、地域の多種多様な社会教育活動が日々展開されている。公民館職員にはそれらを把握しておいていただきたいが、住民の皆さんが横に繋がることの必然性はあまり感じられていない。せいぜい公民館祭りで同じ時空間を共にしているくらいだろう。それで不自由を感じることもないのである。

公民館では様々な地域課題に関する学習が行われ、それに参加した人びとを中心にアクションへと繋がっていく。ただし、顕在化している地域課題にはいろいろな要因が絡まり合い、地域の力はもとより行政との協働なくしては取組が進まない場合が少なくない。行政も複数の担当部署にまたがっていることが多い。ごく単純に考えても連携の必然性はあるようなものだが、なかなか困難なようだ。

そんなことを考えながら登壇した。ここで私が見つけたことは、「みんな『今』を『未来』に懸命につなげようとしている」ことであった。そのために「過去」とつながなければならない取組、今を生きる「人」や「活動」をつながなければならない取組、「未来」を描いて共に（つながり）向かう取組、があることを感じた。（詳細はパネルディスカッション報告に譲る。）

人や活動が集う公民館は捨てたものではない。全国の公民館を牽引する岡山市立公民館へ敬意を表し、今後のますますの実践に期待したい。

第1分科会 地域の子育て支援

みんなで子育て、どんどん広がる地域の輪 ～新しい出会いから年代をこえた友だちづくり～

◆趣旨

地域の将来を担う子どもたちは地域の宝です。子育てを地域で支えるために、岡山市の各公民館ではさまざまな活動を通して子どもと地域の大人が出会い、学び合い、大人同士がつながって子育ての輪を広げてきました。

子どもが安心できる場、笑顔になれる場をつくるために、あなたの力を生かしてみませんか。「ずーっと子育て応援団」として、地域の大人たちができることをいっしょに考えます。

◆実践報告のテーマと発表者

- ①子どもと地域の大人が出会う「夏休みクラブチャレンジ」
福浜公民館クラブ講座「煎茶道・東阿部流」受講生
- ②地域の宝！楽しく遊べるみんなの居場所「ほっとスペース放課後」
京山公民館「ほっとスペース放課後」スタッフ

◆流れ

1. 事例発表…発表後、助言者の感想
2. グループワーク
 - (1) 自己紹介
 - (2) 事例発表の感想を出し合う
 - (3) 分科会のテーマのために、自分ができること、したいことを出し合う
 - (4) グループ発表
 - (5) グループ発表を聞いての会場からの意見、アドバイス
3. 助言者からの意見



◆話し合われたこと

子育て中の親、公民館の子育て講座関係者、NPO など子育てに関わる方々が集い、それぞれのグループでテーマの実現に向けて活発に意見交換を行いました。

地域で長期休暇中と常設の子どもの居場所づくりについての事例発表について、「子どもと大人がつながりを持てることがよい。」「熱心に子どもと関わろうという人がたくさんいることに感動した。」といった意見や「自分たちの活動をする時の参考になる。取り入れたいなと思うことがあった。」という感想がありました。

これを受けて、自分ができることやしたいことを出し合い、「子どもが気軽に集い、思いっきり遊ぶことができる場所」、「様々な体験活動や経験を積むことができるプログラム」といったものを作っていきたいという意見の他、企画・運営を子どもたちと一緒に考えていったり、こうした場に参加していた子どもたちが成長してスタッフになって関わったりすることができれば活動を継続していくことができるのではないという意見もありました。また、地域の中に子育て相談や親が活躍することができる機会を増やしていくこともできないかという親支援の必要性も出されていました。

自分ができること、したいことの見解（抜粋）

○気軽に集える場所…幼児向けの自由に遊べる

子どもがちょっとグチを話せる場もあれば

○親の支援…子育てに悩む親の茶話会

子育て相談

保護者向け料理教室

良いとこどりや任せきりにならない親になるための取り組み

子ども会の役を老人会が担う

○企画・運営…子どもも一緒になって企画・運営するもの

保護者も関わるものや父親が企画するイベント

高齢の男性が活躍できることをする

大学生がボランティアで参加できるもの

小学生→中学生→高校生という流れの中で、ジュニアリーダーを育成

○具体的な取り組み

- ・ 日本文化を伝えたい（挨拶、ルールなど）
- ・ 朝ごはん作りができるように指導
- ・ 絵本の読み語り
- ・ ピクニック
- ・ 子どもたちが公民館文化祭への参加
- ・ 夏休みのクラブ体験企画
- ・ 朝ごはんカフェ
- ・ 見守り隊を続ける
- ・ 空き家をシェアハウスに

◆議論のまとめと今後への課題

公民館大会のテーマにあるように、「地域の未来に向けて、知って、ひろげて、つながって」を子育て支援の面で、地域の大人ができることを考えていきました。公民館を舞台に、子どもの居場所づくりを熱心に取り組んでいる2館の発表。そして、それらの取り組みをはじめ、分科会参加者が関わっている様々な活動に多くの大人が参加し、子ども同士、子どもと大人、大人同士のつながりができていること。岡山市の公民館での子育て支援の豊かさを感じることができました。

助言者からは、会場からの夢のあるたくさんのアイデアに対して実現への期待と、また公民館が子どもたちにとって一つの居場所になることの必要性が語られました。子どもたちが小さい頃から公民館を利用することが当たり前前の生活になること、そして公民館を利用していない子育て世代もまだまだいるので、公民館を使ってもらえるように広く伝えていくことが求められると、今後へ向けてのアドバイスもいただくことができました。こうした会ができることが岡山市の公民館の活動の力強さになっているとのことで、それぞれの地域で新しい出会いからつながりをつくり、友だちになる、そんな機会をつくって継続していくとともにそれぞれの地域との横のつながりも大切にしていきたいと感じた会になりました。

◆助言者の感想

NPO 法人子ども達の環境を考えるひこうせん代表理事 赤迫 康代

子どもを育てるという大切な営みに、様々な世代の人が関心を持ち、次世代を担う子どもたちの成長を応援できる地域社会が構築されることは、多くの方の願いです。そのために、子どもの「今」に必要な経験ができる環境づくりや、子育て中の保護者が地域で支えられるしくみが意図的に必要となっているのが現代であり、第1分科会ではそれらの課題に向き合いました。

大人の文化活動に子どもたちを招く活動や、長年継続されている放課後の居場所づくりの事例発表を聞かせていただき、地域の中で安心できる居場所があることで人と人の温かいつながりの輪が広がっていることに感銘を受けながら、グループ討議でも活発な意見交換がなされました。子育て当事者も参加したくなる活動のアイデアや、気軽に公民館に行けるようにカフェコーナーをつくってはどうかなど具体的な案が次々と誕生し、みんなの気持ちが高まりました。

大会全体を通して、岡山市の公民館の横のネットワークの素晴らしさや、社会教育活動に携わる方々の心の広さや前向きな姿勢に触れ、私自身も多くの学びを頂いた一日になりました。

◆分科会運営委員（市民）の感想

富山公民館利用者 高畑 聡子

私は富山公民館で夏休みフリー塾のボランティアをしているご縁で、第1分科会の運営委員としてテーマや発表事例選定の段階から関わってきました。

当日は「夏休みクラブチャレンジ」と13年間続いている「ほっとスペース放課後」の活動の様子や運営方法、今後の課題等発表していただいた後、グループワークで公民館で活動されている方々の現状や夢やアイデアを聞くことができ、あっという間の分科会でした。

私個人としては、クラブチャレンジの子ども募集の仕方やほっとスペースの公民館へ下校できるようにした小学校との協力体制等、聞いたことが大きな収穫でした。

助言者の赤迫さんも褒めてくださっていましたが、岡山市の公民館のこういう横のつながりがさらなる公民館力の向上に大きく寄与していると思います。「年代をこえた友だちづくり!」、これからもチャレンジしていきます。

◆分科会運営委員（職員）の感想

京山公民館 西村正美

今回、京山公民館は事例発表をさせて頂きました。ほっとスペース放課後の活動を他の地域の方に知ってもらい、たくさんの感想を頂き勉強になりました。家族以外の顔の分かる大人とのふれあいが子どもを豊かにすること、また、地域の人と文化を分かち合う活動が失われてきているので、このような時間を積極的につくっていかなければならないということがわかりました。そのための仕組み作りを公民館が担っているのだと思いました。

グループワークでは地域でいろいろな活動をしている方と出会うことができました。それぞれに、思いをもって子どもたちと関わられていました。その思いをもたれている方がキーパーソンとなり、その方たちとの出会いを大切に、公民館の活動を一緒に育てていくことが地域づくりにつながるのだと思いました。

第2分科会 防災・減災

西日本豪雨を受けて私たちは何を学び 何をすべきか

◆趣旨

平成30年7月の西日本豪雨では、岡山市内でも河川の氾濫や土砂崩れが起きました。避難を促しても避難しない人もいるなど、様々な問題点があがりました。また、市内の様々な地域や公民館で被害状況を可視化したり、当時の地域住民の行動を検証したりするなどの動きがあります。分科会では、それらの活動報告を受けて、地域の災害対策に対し、社会教育の視点からどのように係るのが望ましいかを参加者全員で考えます。

◆実践テーマの報告と発表者

①西向町内防災対策事例

林 雅夫さん（吉備学区安全・安心ネットワーク会員）

②地域での情報共有、話し合いの場を持ってみて

池田 昭雄さん（足守公民館ボランティア）、 若林 美緒（足守公民館職員）

◆分科会の参加人数

市民 36人 職員15人

◆流れ

2つの事例発表の後、グループに分かれて、「ステップ1 豪雨のとき、地域住民が命を守る行動をしなかった・した理由は？」「ステップ2 災害のとき、地域住民が命を守る行動をするためにはどうしたらよいか？」「ステップ3 地域住民ができることは何か？公民館とともにできることは何か」についての話し合いをし、発表した。

◆話し合われたこと

「ステップ1 豪雨のとき、地域住民が命を守る行動をしなかった・した理由は？」

- ・何の根拠もなく自分は大丈夫と思った。危機感が薄い。
- ・気象情報、ハザードマップを理解していない。
- ・どこに逃げてよいか分からない、避難経路が分からないなどの知識不足のため危なくなつてから逃げようとしても動けない。
- ・高齢者、障がい者等の弱い立場の支援について町内での打ち合わせができていない。
- ・体育館の施設の問題（体育館の高さ、板間は体が痛いなど）

「ステップ2 災害のとき、地域住民が命を守る行動をするためにはどうしたらよいか？」

- ・自分の命は自分で守るという意識の共有。
- ・日頃の訓練で地域住民の意識を高める。
- ・災害時の情報収集と伝達が重要。テレビ、ラジオ、ネットなど自分で正確な情報を得る手段を複数持っておく。錯綜する状況下で情報を正しく伝える。
- ・避難所について知る。災害によって避難場所を変える必要があることを知る。
- ・ハザードマップを活用し、避難経路を確かめる。
- ・近所で声をかけあう。「向こう三軒隣」の助け合い。
- ・防災組織を作る。防災組織はあっても機能していない所もある。実働できる組織になるよう見直す。

「ステップ3 地域住民ができることは何か？公民館とともにできることは何か」

- ・過去の歴史を含め、自分の地域を知る。
- ・日頃の訓練で地域住民に意識を高める。
- ・防災意識の向上と取得のため地域住民を対象にして継続的に防災教育をする。
- ・地域のつながりのサポート。
- ・地域と行政との自主防災組織や防災学習の橋渡し。
- ・地域の防災リーダーを育成するための養成講座の開催。



◆議論のまとめと今後への課題

時間が足らず、話し合いが不十分になってしまったグループもあったが、活発な意見交換が行われた。災害が起こらないと思い込んでいる意識を変えること。自分の命は自分で守るという意識を持つこと。防災に対する知識を得るといった意識や知識についての課題や、防災組織がない、防災組織はあるが機能していないなどの組織についての課題が多くあがっていた。

いずれにしても社会教育施設として公民館が関わっていくことができる課題である。一朝一夕に解決する課題ではないが、早急に取り組むべき課題であると思う。

◆助言者の感想

岡山市防災ボランティアネットワーク・防災士 西村 輝

第2回岡山市公民館大会で「防災・減災」の分科会を担当しました。

全体会のパネルディスカッションでは、香川大学 清國祐二先生をコーディネーターとして各分科会の助言者が、公民館のあるべき姿や要望等ポジティブな意見で有ったと思います。

私は、公民館が防災・減災について果たす役割の一つとして、教育を取り上げました。昨年7月の西日本豪雨では甚大な被害が出ました。このことを教訓に多くの方に災害への知識を持っていただき一人の犠牲者も出さない社会を築いてほしいと考えています。そこで、知識を与える場として、大きな役割を持つのが公民館であると考えます。もちろん学校教育の中でも重要ですが、一般社会人を対象とした場合には、公民館が大きな役割を果たすと思います。

分科会では、まず事例発表として吉備公民館より昨年の豪雨で何が起こったかの発表と、足守公民館からは豪雨についてのワークショップの発表が有りました。

分科会のワークショップでは、皆さんが熱心な話し合いをし、発表をされました。そんな中で私の役割は、行政では言えない事を、かみ砕いた形でわかりやすく伝えることだと考えています。第三者的な意見を言うことで、より身近な物事として理解できると思うからです。

近い将来南海トラフの地震も心配されていますので、公民館活動を通して犠牲者を出さない社会につながれば良いと思います。

◆分科会運営委員（市民）の感想

足守公民館 池田 昭雄

「避難は、避難所へ行くことじゃない！」助言者からの鶴の一声！さらに「自分の命を自分で守るため、もっと安全なところへ避難すること！」と続きました。この言葉は、公民館講座などで聞き慣れているのに、まず頭に浮かぶことは、とにかく避難所へ行けば助かるという想いと行動。

分科会では、二つの事例発表と3つの課題について話し合うワークショップが行われた。定員54名の部屋に51人が集まり、短時間での話し合い。どうも盛り上がりすぎて、消化不良だったのでは？

いずれにしても、防災・減災についての学びの場は公民館、地域住民が自由に話し合えるのも公民館、地域住民にとって、公民館は“要の施設”です。

今後も、地域住民が正しい防災・減災の知識を得るための講座、情報交換会などを企画・開催して、安全安心の町づくりの支援を続けていただきたい。

◆分科会運営委員（職員）の感想

操南公民館 万代 賛誉

7月豪雨に焦点を当てた内容で開かれた今年度の防災・減災分科会は、51名の参加者で会場がいっぱいだった。

事例発表では吉備の西向地区、足守の公民館と連携した地域活動が発表された。どちらも豪雨災害直後に被害状況を調べ、写真展示などによる情報発信、組織の見直しや要支援者の把握まで及び、スピード感があり実践的なものだった。防災活動を活発化させたいと願う参加者にとって、ひとつのモデルとなるような内容だった。

しかし、今年度は地域活動に活発な参加者だけでなく、災害以後、自分たちの身を守るために何かしなくては、という思いで参加した人も多かった。そのためグループワークで話題となったのは自助のための知識、どんな組織が望ましいか情報を提供してほしいという内容だった。被害の大小や地域の差異にかかわらず、この度の豪雨災害で芽生えた防災意識を、これからの学びあいや地域活動に結びつけ、風化させないことが公民館に求められていると感じた。

第3分科会 地域福祉

地域・福祉をつなぐ公民館 ～共生社会をめざして～

◆趣旨

岡山市における65歳以上の高齢者人口は18万人を超え、市民の4人に1人が高齢者という「超高齢社会」を迎えています。誰もが自分らしく生き生きと暮らし、支え合う地域共生社会をつくるため、公民館は地域住民の思いや持っている力を引き出し、互いに学ぶ環境や仲間づくり、活躍の場所を提供しています。そのような公民館の地域団体、地域住民を「つなぐ」役割について、事例を通じて一緒に考えてみましょう。

◆実践報告テーマと発表者

公民館に届く小さな声をひろうことから、実現できたこと
～平成30年7月豪雨災害をふりかえって～

【発表者】平島健康福祉委員会：柿崎 由秀さん、
上道公民館職員：片山 るみ



◆参加人数 49名（市民34名、職員15名）

◆流れ

実践報告と、助言者の活動紹介（「公民館からつながった上南地域の取り組みの輪～公的機関と地域との連携を可能にした取り組みの紹介～」）を聞いた。休憩をはさんで8グループに分かれ、公民館のつなぐ役割を疑似体験するワーク（話し合い）を行った後、各グループのワークを見てまわって話し合った内容を共有した。

◆話し合われたこと

【公民館の役割を疑似体験するワーク】

①地域福祉に関して「したいこと」「公民館にしてほしいこと」「悩み・気になっていること」をふせんに書いて、出しあう ⇒ ②実現・解決するために、「どこにつながって」「何をやる」か、考える ⇒ ③新しい、おすすめのアイデアを中心に他のグループに紹介し共有する。

◆議論のまとめと今後への課題

一昨年・昨年度の当分科会では、地域のなかにあって人や情報が集まる場所であり、人・団体・活動などを「つなぐ」機能を担う公民館への期待が寄せられた。それをふまえて、今回は公民館の「つなぐ」役割について、より深めてかつ具体的に考える分科会にしようと、分科会運営委員会でプログラムを練った。

大会当日のグループワークは実に時間不足であったが、どのグループも白熱した情報・意見交換が行われた。一人ひとりが抱える課題や思いを出しあい、それを様々な立場の人たちが、みんなの共通の課題ととらえ、解決あるいは実現めざして知恵を出しあい議論した。また、各グループのファシリ

テーターをつとめた公民館職員の姿に、公民館の「つなぐ」役割も実感してもらえたのではないかな。

分科会後の運営委員会で、各グループのワークをふりかえりながら、さらに熱い議論を重ねた結果、市民運営委員より、分科会の成果を行政（市、教育委員会）や関係機関に「提言」せよと宿題をいただいた。そこで、ここに分科会で議論された内容を記し、今後、各館での実践に活かすとともに、公民館の役割を各所にアピールしていくこととしたい。

1 集いの場づくり ～公民館に来られる人も来られない人も～

「集いの場」では…顔見知りになる、見守り、地域活性化・にぎわいづくり（地産地消軽トラ市、共食の場、カフェ等）、課題の共有・解決に向けた勉強会や話し合い、地域づくり

* ニーズに合ったボランティア活動の担い手養成・発掘と支援、情報収集・発信

* 1人でも来られる自由解放スペースで敷居を低く～カフェ、勉強スペース、雑誌、卓球台、囲碁・将棋

* 出前講座：様々な理由で公民館が遠いと感じられる人も来られる「集いの場」（コミュニティハウス、サロン、単位町内会や近隣の町内の集会所など）へ、ボランティアなどが出向く

2 横のつながりづくり

【関係機関や地域団体とともに情報交換会】

- ・ 関係機関の担当職員の会（しゃちほこの会等の名称）
…社会福祉協議会・地域包括支援センター・保健センター・在宅介護支援センター等
- ・ 福祉事業所、民生委員会、地区サロン、担当職員等の会（福祉連絡会等の名称）
- ・ サロン連絡会（サロン代表者等の会）
- ・ サロン同士の交流会、ボランティア活動をしている人・組織の交流会 など

【団体・人・関係機関】

- ・ 町内会、老人クラブ、サロン、体育協会、民生委員会、愛育委員会、栄養改善協議会、地域の農家(JA)、シルバー人材センター、公民館クラブ講座・講座生、地元の特技のある方（意外と人づてで見つかる）、老人ホーム等の施設、医療機関、学校(PTA)、小・中・高・大学生、傾聴ボランティア、福祉作業所、交通関連の民間企業
- ・ その他：県・市レクリエーション協会、ふれあいセンター（人材養成講座）、「岡山市支え合い活動事例集」の講師派遣リストに載っている団体
- ・ 行政等：関係課、区役所、地域センター、社会福祉協議会、地域包括支援センター、保健センター、在宅介護支援センター、岡山市介護予防センター

3 情報の収集と発信

【収集／発信する内容】

- ・ 公民館がどんな地域情報を把握しているのかということを知らせる
- ・ 公民館のことや、集いの場に出かけることのメリットを伝える
- ・ 関係職員の会（しゃちほこの会等）での協議内容（住民から募集→協議→報告）
- ・ ボランティア募集情報・ボランティアしたい情報など（地域のボランティアセンターのような機能）
- ・ 地域の人材（人材バンク）
- ・ 公民館事業（見える化）、他館の情報(公民館だより)

- ・サロン活動一覧
- ・高齢者介護の情報（介護の仕方、認知症の人をどう支えるか・どこにつなげばよいかなど）

【手段】

- ・公民館だより
- ・インターネット（公民館ホームページ／電子町内会の活用・情報共有）
…更新に努める。住民が自ら情報収集できるようパソコン、スマホを使える人を増やす
- ・公民館に掲示板設置（地域情報、ボランティア情報、会議内容等）
- ・公民館職員が地域に出向いて話す／来館者から情報を収集し、各種団体へ共有・提供
- ・住民が友人知人へ声かけ
- ・地域マップづくり（病院・おすすめのお店・防災 etc…）
- ・公民館活動など、マスコミを活用して発信

4 若い世代・次世代とのつながりづくり、若い世代が主体となった活動をすすめる

- ・若い世代に公民館を知ってもらう広報：学校、保護者、20～50代
- ・世代をこえた交流…子ども向けの介護等の勉強会、食堂・カフェ（集う場）、公民館クラブ講座生が夏休みの子どもの向け講座でふれあい、子ども・子育て世代への支援（乳幼児の親の集う場、共働き世帯の子どものケア、自主勉強スペースと学習支援）
- ・子ども・若い世代主体の活動…子ども主体の不用品活用市など、中・高・大学生などの若い人たちのボランティア組織、若い人の集う場
- ・独身者の出会いの場づくり

5 その他

- ・独居、引きこもり、精神疾患の方、認知症の方、障害のある方、免許証を返納したり自転車に乗れなくなったり体力がおとろたりして出かける先が限られた高齢者、災害時の要援護者等への支援
- ・交通手段：地域の人で送迎する仕組みづくり、乗り合いタクシーなど交通の便の開拓などの協議

◆助言者の感想 「見つけようあなたの地域の未来を ―知って ひろげて つながって― 」

特別養護老人ホーム穂香の里 施設長／上南在宅介護支援センター センター長 久富 めぐみさん

地域には様々な課題が山積しています。人々がつながるということは、それらの問題や課題を解決していく大きなネットワークを皆で考え構築していくことだと思えます。そのためにこれからの公民館には、その“つなぐ”役割を十分理解しコーディネートしていく力が必要になってくるのです。

この第3分科会では、豪雨災害という非常事態に、公民館と住民が同じ目的に向け取り組んだ平島地区（上道公民館）の活動経験を通して、「公助」と「自助」が共につながり『共助』に至った経緯についての事例紹介がありました。また、この事例紹介を受けて、当日の分科会で各グループに配属された見ず知らずの方々が、与えられた短時間に、コミュニケーションというツールを使い、地域にある公民館の機能や役割について話し合いを重ねていくうちに、どのグループも個々の参加者（点）の意見が積み重なり影響しあいながらグループ（線）、会場全体（面）へとつながる体験をすることが出来ました。

今回の大会を通じて得たこれらの経験は、地域との協働を推進していくこれからの公民館にとって、

大きな力になったことと思います。プレ大会を含め毎年行っているこの取り組みは、これからの岡山市の公民館が取り組んでいるE S D（持続可能な地域づくりのための学び）の活動の認知と拡大のための確実なステップになる事は間違いありません。

最後に、これから地域にある公民館がどの世代も気軽に立ち寄り利用できる交流の場として“つなぐ”機能の充実が図られ、地域づくりのための学習の場としての機能が十分発揮されることを期待してやみません。

◆分科会運営委員（市民）の感想

高島公民館 中田 樹子、庄司 和子

第3分科会は、『地域・福祉をつなぐ公民館』をテーマに、公民館の役割について掘り下げてかつ具体的に考える分科会にしようと、毎回熱く議論してきました。

大会当日、一般参加者と一緒にグループに分かれてのワークショップは、したいこと・困りごとを出し合う中で、「これはここへつなぐ」「こうしたらどうかな？」「納得！」とその内容を共有しあい、活発な意見交換で時間が足りないほどの盛り上がりでした。

問題点を出し合い、その解決に向けてどことつながることができるかという具体的な話し合いは、実現可能な解決策として今後活かされ、いろいろな関係機関や団体、人同士がスムーズにつながることで、私たちの住んでいる地域がより住みやすい所になる事を願っています。

公民館は、誰もが気軽に立ち寄れる環境の場をつくり、新たな人との交流で情報交換し、地域住民をつないで元気になれる居場所だと改めて感じました。

今回、運営委員として関わらせて頂き充実した時間を共有させて頂いた事に感謝いたします。

◆分科会運営委員（職員）の感想

福田公民館 蔵坪 杏衣

「地域・福祉をつなぐ公民館」をテーマに、事例発表では『平成30年7月豪雨災害で、公民館だからこそできたこと』を振り返りました。後半では、地域福祉に関して気になることや公民館でしてほしいことを出し合い、実現・解決に向けて公民館はどこへ協働を投げかけることができるか、何ができるか『公民館の疑似体験』のようなワークショップを行いました。

ワークショップは、時間が短く残念でしたが、参加者全員が活発な意見を出し、各地域での取り組みや課題の意見交換もでき、大変充実した時間となりました。また、「公民館でしてほしいこと」がたくさん挙がり、公民館への期待の高さも強く感じました。何より、公民館だからこそ、地域の情報を多方面から収集・提供できる強みと、地域と行政・各種団体との相互をつなぐ重要な役割を担っていることを再認識しました。

今回公民館大会で挙げた市民の方々の『公民館への熱い希望・期待・貴重なご意見』は、行政・地域・各種団体と広くつなげ、地域福祉に還元される“行動の実践”があってはじめて、公民館大会の意義を果たすことになると思いました。

第4分科会 若者の参画

若者が一人一人が「生き生き」！ その未来とは

◆趣旨

若者が生き生きと活動することで、地域社会にはどんな変化がもたらされるでしょうか。また、若者自身にとって、地域活動に取り組むことによって何が得られるのでしょうか。若者に大いに語ってもらい、その上で現状からつながっている地域の未来について語り合います。

◆実践報告のテーマと発表者

- ・「高校生プロジェクト五福通りのクリスマス」活動報告
高校生プロジェクトメンバー、西大寺公民館、NPOみんなの劇場おかやま
- ・灘崎公民館中高生登録ボランティア組織「チーム灘」の地域活動 チーム灘
- ・ふるさと建部の未来をつくる！「たけべ部」の挑戦！ 建部町公民館職員 入野 曜子

◆流れ

- ・西大寺公民館を中心に活動する「高校生プロジェクト」、灘崎公民館の中高生登録ボランティア組織「チーム灘」、建部町公民館の「たけべ部」、それぞれの中学生や高校生のメンバーが活動に参加したきっかけや、活動に参加して感じた自分自身の成長の軌跡などを若者自身の言葉で語る報告を聞いた後、昨年度の公民館大会で出た課題でもある【若者にとって地域社会に関わることの利点(イイコト)と地域社会にとっての利点がほんとにマッチングしているのか?】をテーマに、「えんたくん」を使ってグループに分かれて話し合い、思いを共有し合った。

◆話し合われたこと

- *各グループに中学生または高校生が入っており、地域活動に関わった感想、公民館の印象、どんな地域にしていきたいかなど、若者が若者自身の言葉で語った。大人が求めていることと、子どもの興味はマッチングするのかなという課題については、子どもの力を引き出せる力を持った大人が、子どもたちにとって「楽しい」「興味がある」と感じるような公民館に来るきっかけを用意することで、子どもたちは公民館に来て、活躍できる場を見つけることができる。大人とが求めるものと、子どもの興味は合致するということが共有できた。
- *若者が公民館に行きたくなるように発信すること。若者自身が公民館のイメージを変えたり、また、子どもたちが遊べるようなイベントを若者自身で作っていく、といったことが若者の参画を進めるうえで大事だと思う。
- *「人と人とのつながり」がすべての基本になる。大人でも子どもでもいえることで、大人だと町内会や自治会のつながり、子どもだと普段からの友達同士のつながりや大人とのつながりなどが大切だと思う。
- *自分たちの地域から外に出て、他の地域で行われている先進的な取り組みを自分の目で見ることで、そしてそれを自分たちの地域に持ち帰ってやってみる。大事なのは自ら考え実行すること。自信を持つ。成果を上げる。達成感がある。さらにステップアップする。そしてまた自ら考え実行する。

このようなサイクルで持続可能な社会をつくる。地域の人と関わることで地域に愛着がわいてくる。ボランティアのポイント稼ぎで最初は始まってもいいが、地域の人と関わるのが第一番。公民館の職員の情報力やNPO等とのつながりが大事である。

- * 公民館が若者がやりたいことができる場を提供することが大事。高校生自身がやりたいことや言いたいことをそれぞれ持っている。でもそれを言う場所もない、することができる場所もない。そういう場所を提供してあげたら、若者は走るように寄りついてくると思う。そういう場所ができれば子どもたちは公民館のことを知ることができるし、そこに来てくれた子どもたちに、他にもこんなプロジェクトもあるよと声掛けをすれば、若者は参加をしてくれるし結果として地域貢献をすることにもなると思う。
- * 大人が子どもたちに「子どもは地域の宝」であることを繰り返し伝えて行く必要がある。大人の期待を感じることで子どもたちの気持ちもあがっていく。親が子どもに公民館のボランティア登録に行くように促すなど、大人の関わりが子どもたちを前に向かせる。また、子どもがボランティアに励んでいる姿を見て、大人の方も自分たちもボランティア活動をやらないといけないなという気にさせてくれる。このようにして、いい関係性ができてくると思う。公民館が子どもたちを参画させる場を作り、地域の課題とマッチングさせるということが大事。
- * 自分が小学生だった時に公民館に行くと、中学生のお兄さんお姉さんが遊びを教えてくれた。そうした中学生を見てかっこいいな、すごいなと思った。そして自分が中学生になったとき、同じようにボランティア登録に入ろうと思った。中学1年生の時にすごく人見知りで、友達を作るのが苦手だった。ボランティアに入って、人とコミュニケーションが取れるようになったり、知らないことが分かるようになったり、人との関わりが大切なんだと思った。苦手なことが克服でき、自分が変わったなと感じているし、もっと変わっていきたいと思っている。
- * 参加するきっかけはボランティアに参加することへの得点だったり、ポイントが付いたり、そういうことでもいい。参加することでおもしろいと思ったり、感動したりするそういう体験をすることが重要。学校以外の場所で、いろいろな地域の人と関わるという経験をすることが自分自身の成長にとってとても大事。「参加」と「参画」は手がっていて、参加するきっかけは一生懸命考えるが、来てくれた子たちをどのように参画に持っていくのが難しいと感じた。学校教育と公民館の社会教育が役割分担をしながらやっていくことが必要。そういったところから核になる子どもをピックアップし、コーディネートしていくことが大事。大人たちの「これは君たちにためになるから」といった押しつけが見えてくると、関わっている中高生たちも苦しくなる。バランスのとれたコーディネートをしていくことが大事。



◆議論のまとめと今後への課題

閉会の挨拶をなさった市民の方の言葉が端的・的確にまとめを語られていました。「昨年課題となった『地域社会に関わる上で、若者と地域の利点は一致するか』は、今回でたしかに一致すると認識できた」と。それは、まず若者参画の仕掛けを十分に意図した3つの公民館の事例の内容の説得力や、関わる若者の意識の高さ、さらにグループワークでの若者たちの意見や考えにみえる活動の濃さがこう語らせたといえます。公民館における若者参画のうねりは、1年を経てあちらこちらで芽生え確実に進化していることを実感した大会でありました。課題はただ一つ、すべての公民館・地域で若者の参画が開花するのがいつになるかという時間の問題だけです。

◆助言者の感想

助言者 江森真矢子

若者の参画というテーマに対し、昨年の分科会では「そもそも若者のやりたいことと、公民館が期待していることはマッチしているのか？」という疑問が生まれ、今年はそのスタート地点になった。事例発表でもディスカッションの報告でも、地域活動に関わることが若者たちにとって、想像以上に大きなプラスの影響があると実感した方が多かったのではないだろうか。分科会に参加する若者たちには「大人に忖度せず思ったことを話して」と伝えていたが、そんなことを言うまでもなく対等な議論が繰り広げられていた。

その様子を見て思ったのは、大人も子どもたちに忖度する必要はなく「助けて」「手伝って」「一緒にやろうよ」と言いたいことを言ってもよいのではないかということ。また、学校も小規模化し人間関係の多様性が生まれにくくなっている今だからこそ、学校でも家庭でもないサードプレイスとしての公民館の可能性は大きくなっているのではないかということだ。R.ハートの「参画の梯子」(図)に準えるなら、現在岡山市内の公民館で行われている活動で「非参画」にあたるものはなく、若者と大人が対等に協働する場面が増えていくことを予感させる分科会だった。

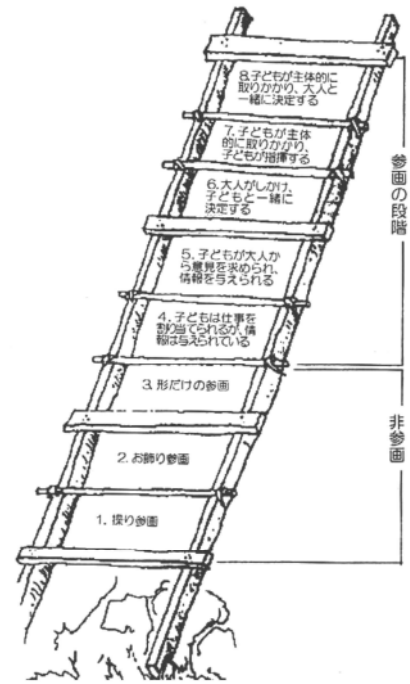


Fig.1 参画のはしご (Hart, 1997 木下他訳 2000, p.42)

◆分科会運営委員(市民)の感想

NPO法人みんなの劇場・おかやま 延谷 幸子

第4分科会「若者の参画」の事例発表では、実際に活動を行った中学・高校生の生の声や公民館職員の方の熱い思いを聞くことができました。続くグループワークでも若者が仲間や大人とのふれあう中で自らの殻を破り、夢を実現した体験談に勇気をもらいました。公民館をきっかけにした体験の素晴らしさを若者たちは十分に理解し、将来や次世代への橋渡し役にまで視野を広げています。昨年、同分科会で挙がっていた「参画する若者と地域のメリットは相入れるのか」という課題を、すでに軽々と跳び越えていました。私も西大寺公民館と協働した「高校生プロジェクト」のサポーターの一人として、高校生の成長ぶりは我が子のことのように嬉しく感じました。今後とも若者のありのままを受け止め、本気で応援する大人でいたい。そのためにも地域情報や幅広い人とのつながりを蓄積していく必要を感じています。

◆分科会運営委員（職員）の感想

建部町公民館 入野 曜子

自館の地域で取り組んでいる活動に対して、アドバイスやヒントを頂けたら…という思いから、今年初めて「若者の参画」分科会に運営委員として参加しました。

運営委員会では、昨年議論の中で出された「若者にとって地域社会で関わることの利点と地域にとっての利点が本当にマッチングしているのか？」という課題をベースに様々な話し合いを重ねる中で、市民の運営委員さんや助言者である江森さん、そして他館の職員の皆さんからたくさんことを学びました。普段は自館だけで完結させてしまうことが多い中、一緒に議論出来ることがとても嬉しく幸せな時間でした。

そして当日、建部町公民館の「たけべ部」の取り組みについて、つたない事例発表をさせて頂きました。準備も当日も本当に苦しかったけれど、これまでを整理しこれからを考え、参加された皆さんからたくさんアドバイスや励ましを頂いたこの機会は、私自身にとってとても貴重で有り難い経験でした。

第5分科会「次世代につなぐ地域づくり」

学びと交流を深め、元気な地域の未来を

◆趣旨

地域における少子高齢化やつながりの希薄化が急激に進み、活動や組織の担い手が不足し、支え合う仕組みが失われつつあります。また、先人から受け継いだ自然・歴史・文化を含め、地域の宝を守り、つないでいく道も途絶えようとしています。この分科会では、『次世代』を『すぐ後に続く世代』ととらえ、郷土愛を育みながら楽しく充実した活動が継続できる仕組みづくりを考えます。

◆実践報告のテーマと発表者

「高松の歴史文化を次世代に継承するための各団体の取り組み」

<発表者>吉備路ボランティアガイド：奥田 勝さん
高松公民館職員：福田 敏子

「次世代に向けて人と人をつなぐ！『大自己紹介大会』からの『ノープラン！お泊り大会』」

<発表者>桑田もつともつと会：田中 修生さん・松村 陽子さん

◆分科会参加人数 市民 39人、職員 25人

◆流れ

13:10～ 開会、趣旨説明、助言者紹介、流れの説明

13:15～ 事例発表

①高松公民館：様々な取り組みをしているが、継承者がなかなか育たない。

②大元公民館：巻き込む人をどんどん増やしていきたい。子どもを公民館の応援団にしたい。

13:50～ 休憩

13:55～ グループ討議

自己紹介の後事例発表の感想や質問を出し合い、「次代につなぐ地域づくり」の工夫や仕組みなどをテーマに話し合いを行った。

14:45～ 発表

グループ内で出た質問や意見を模造紙に貼ってまとめ、各グループの司会者が話し合いのポイントを発表した。

15:00～ 事例発表者からのコメント

15:15～ 助言者からのコメント

15:25～ 司会者のまとめ、閉会



◆話し合われたこと ※別紙参照

◆議論のまとめと今後の課題

松江市玉湯公民館長を助言者に、地域の少子高齢化やつながりの希薄化の進む中で、「次世代」を「すぐ後に続く世代」ととらえ、活動が継続できる仕組みづくりを考えた。

高松公民館からは、歴史文化を次世代に継承する難しさについて、大元公民館からは、世代を越えた人間関係づくりの取り組みについて報告されたのを受け、「参加」の人を“参画”につなげ、地域づくりに結びつけるには」といった議論がなされたが、仕組みづくりの点での目覚ましい結論は導き出せていない。

助言者からは、玉湯では中学生が祭りに参加することからスタートし、年数をかけて若者も住民も地域づくりに参画するようになったそうだが、一朝一夕に仕組みを作れたわけではなくたゆまぬ努力が必要とのコメント。岡山市公民館も人をつなぐことの大切さを再確認し、諦めず継続した取り組みで地域の元気をつくりだしたい。

◆助言者の感想

松江市玉湯公民館 館長 岩田 渥男

近年、公民館のあり方が問われている中、今回の研究大会は本来の公民館のあり方を求める素晴らしい大会であったと感じました。

オープニングの「チーム灘」の中学生の発表は、子供たちに故郷に誇りをもち、故郷を愛する心を育てる取り組みでした。このような活動が次世代に継承されるものと思いました。

分科会では参加者の大多数が地域の皆さんであり発表の中心でもありました。グループワークでは取り組みを運営される時の諸問題について熱心に討議されており、岡山市の皆様への地域課題に対する思いは、将来必ずや実を結ぶものと確信いたしました。

研究大会に参加させていただき、私自身多くを学ばせていただきました。本当に有り難うございました。今後、岡山市の公民館活動が益々盛んになりますように！

◆分科会運営委員（市民）の感想

岡輝公民館 IT ボランティア 杉山 里司

岡輝公民館で IT ボランティアとして活動させていただいています。現在、直面している問題はボランティアが減りつつあることです。今回、この分科会に参加し、高松公民館と大元公民館の発表を拝聴させていただき、各公民館のボランティアの方々が次につなげる努力をされていることを身近に感じました。

さらに、当分科会の助言者の岩田渥男氏の松江市玉湯公民館の活動をお聞きし、公民館に地域の人が集えるように仕掛けをし、一時的なイベントに終わらせず、企画運営に幅広い世代の地域住民の参加を促していること、性急に結果を求めず、将来を見据えて活動すること、地域に暮らす方々が一人でも多く公民館活動に参加できるようにしていくことの大切さを気づかせていただきました。

最後に公民館利用者として、公民館が地域住民の集う場として中心となるように、今後ともできるだけ協力させていただく所存です。

◆分科会運営委員（職員）の感想

高松公民館 福田 敏子

私は昨年度から引き続き「地域づくり」分科会に参加しました。

前回大会では、妹尾公民館「井戸マッププロジェクト」、瀬戸町ダルマガエルの会の取り組みについて聞き、グループで話し合いました。そのことが、高松地域の取り組みを振り返り、公民館職員としてできることを考える機会になりました。

今回は運営委員として打ち合わせに参加し、前回の反省も踏まえ分科会の進行や時間配分などもより良いものにできたと思います。

吉備路ボランティアガイドや「高松歴史を楽しむ会」「造山古墳蘇生会」などのメンバーとして活躍される奥田 勝さんにお声掛けして運営委員となっただき、日頃の活動について発表していただきました。高松地域では多くの団体が多岐にわたる取り組みを行っているため、簡潔にまとめるのは難しく、どのような流れで説明するかは奥田さんと相談しながら準備しました。

その後のグループワークでは「自分の住む地域にも貴重な史跡があるが、地域住民がまだまだそれを活かしてきていない」という参加者がおられ、高松の発表を聞いて感じたことを話してくださいました。反省点もありますが、参加者の議論の端緒として色々なものをお伝えできたのかなと感じています。

グループ 番号	「次世代につなぐ地域づくり」の工夫や仕組み などについて話し合った内容
1	地域のお祭りに小中学校のPTA役員を運営委員に加えると、つながっていくのではないかな。また、事例発表(勾玉作り)にもあったが、小学生の時に得た成功体験を基に中学生が小学生を教える側になるということも、次世代へつなぐ一つの方法ではないかな。小中学生を中心に、公民館で活動をしていく仕組み作りが必要だ。
2	すぐ次の世代(30~50代)へつなげるのであれば、その子どもを巻き込んでいけば次世代につなぐ活動になっていくのではないかな。そのためのキーワードは「人と知り合うこと」である。
3	異世代交流が大きな力になる。そのエッセンスになるのは「お祭り」のような楽しいこと。何か一つのことを目的にして、違う世代の人が寄ってたかって話し合いをしていくことで、コミュニケーションができていく。これが一番手っ取り早い「次世代につなぐ」という方法だと思う。
4	子どもが少ない、自治会役員の成り手がいないという話題で盛り上がったが、何が必要なのかな。つながりづくりが大事なのだが、そのためには顔なじみになる「場」が必要だろう。そこがお楽しみ場(お泊り会やお祭りetc.)だと尚良い。目的を明確にしていけば、活動をしていく中で不満や不信も出にくく、協力する人も増えるだろう。
5	人間関係を作っていくことが地域づくりそのものではないかな。そのためには皆が同じ立場で動けば良い。皆が同じ立場になってサポートから入っていけば、順次上に上がっていける人が出てくるのではないかな。
6	小中学生やその親世代が一堂に集まれる行事=祭りという場を設けたら良いのではないかな。自分の住んでいる地域に愛着を持つことが重要。住んでいる地域を知って、小さい頃から郷土愛を育む環境づくりが大切だろう。
7	人と人をつなぐきっかけをどう作るか。地域の中でなかなか顔の見えない若い人たちは地域活動に対して無関心に見えるが、実はそうではない。やりたいことはある！30~40代の親世代の間で丁寧に、常に、子どもたちへ声掛けをしていけば、子どもも親(30~40代)も自然に活動へ加わっていくようになるのではないかな。キーワードは、絶え間なくキーマンを育て続けること。
8	ただ「つなごう」「連携しよう」と言っても、なかなかつながらない。目に見える形のツール作りが必要。
9	組織作り・仲間づくり・つながり作りをしていかないといけない。地域の中で何を伝えていけばいいのかな。たとえば、歴史をとっかかりにするにしても、ため池を切り口にしたら防災にもつながる。そうすれば、子どもから大人まで関心を持ってもらえるのではないかな。
10	「次世代につなぐ地域づくり」は、テーマを特化しようとしてテーマがどんな切り口であろうと、そこからうまくつなげていって、地域づくりに結び付けていこう！キーワードは「参加」の人を“参画”につなげていくこと。